

偽りの記憶の想起に関わる個人差の影響—記憶再構成誘導との関連

松原生枝・北神慎司

(愛知学院大学大学院文学研究科・島根大学法文学部)

key words : 偽りの記憶, 個人差, 記憶再構成誘導

偽りの記憶は臨床場面で発見され、問題となっている。本研究において、偽りの記憶は、誘導によって想起された、まったく起こらなかった出来事にもかかわらず、想起されてしまう記憶とする。また、出来事の生起そのものの想起が誤りであると同時に、想起の際に「確かに起こった」という信念が伴われる。

本研究では、実際の場面に近い状況で誘導され想起された偽りの記憶について、その形成に関わる個人差を検討する。本研究の仮説は、被暗示性や解離体験の頻度が高い人は現実性識別が困難であるということから、CIS、DESで高得点の者ほど、より確信を持った偽りの記憶を想起するだろうということとする。SDS、TASに関しては、本研究の結果とHyman & Billings(1998)の結果を併せて、検討する。

方法

被験者 島根大学生 70 名 (記憶再構成誘導群 35 名・統制群 35 名)

材料 創造的イマジネーション尺度、離体験尺度、社会的望ましき尺度、没頭性尺度の 4 つの尺度を用いた。

手続き まず、心理テストとして CIS、DES、SDS、TAS を行う。次に記憶再構成誘導群では、あらかじめ作っておいた偽の心理テストの結果 (全員同じで、洞察力のみ高い結果) を提示し、洞察力が大変高いというフィードバックを与えた。そして、洞察力が高い原因は、病院のベッドの上に設置された色鮮やかなモバイルを見て、過ごしていたためであると告げた。次に、その記憶を思い出させ、生まれた頃まで遡った時に、「…生まれたばかりの頃に戻りました。あなたは病院のベビーベッドの上にあります。何をしていますか?」と尋ね、さらに、その状況を述べた者に対しては、「頭の上に何が見えたかをよく考え、思い出してみてください。」と尋ねた。

また統制群では、心理テストが終了後、フィードバックは行わず、1・2 分時間をとって、生まれた頃の記憶を思い出すように求め、思い出したという人にはどんな状況を思い出したかを尋ねた。

その後、両群の記憶を思い出した被験者には、思い出した記憶の確信度、鮮明さ、記憶を思い出すのにどれだけ集中したかについて 5 段階で評定させ、記憶を思い出さなかった被験者には記憶を思い出すことにどれだけ集中したかについて 5 段階で評定させた。

結果

生まれた頃の記憶があり、確信度が高い人ほど、より確かな偽りの記憶を想起していると考え、1 点から 5 点の範囲で得点化した。

次に、外れ値の影響を除外するため、個人差尺度ごとに標

準得点 (z 得点) を算出し、 $z < -2.0$, $2.0 < z$ を除外した。その後、偽りの記憶、個人差、記憶の鮮明さ、想起への集中度の関連について調べるため、それぞれ相関係数を求めた (表 1)。

表1 偽りの記憶、面接における質問と個人差の相関係数

	FM	CIS	DES	SDS	TAS	鮮明さ	想起への集中度
FM	—	.43*	.35†	.11	.22	.48**	.46**
CIS		—	.22	.21	.45*	.23	.28
DES			—	.05	.49**	.45*	.17
SDS				—	-.03	-.12	.07
TAS					—	.21	.24
鮮明さ						—	.40*
想起への集中度							—

注) FM=偽りの記憶, CIS=創造的イマジネーション尺度, DES=解離体験尺度, SDS=社会的望ましき尺度, TAS=没頭性尺度

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

その結果、偽りの記憶と CIS には有意な正の相関関係が見られた ($p < .05$)。また、偽りの記憶と DES には正の相関関係の有意傾向が見られた ($p < .10$)。一方、偽りの記憶と SDS、TAS には相関関係が見られなかった。

考察

まず、偽りの記憶と CIS に正の相関が見られた。これは、思い出された出来事や出来事の詳細についての暗示を受け入れやすいためと考えられる。また、イメージ能力の高い人は心の中に思い浮かべたイメージ自体が鮮明であるため、自分の思い浮かべたイメージが現実起こったことであるのか、ただ想像したことなのかという情報源の識別できなくなり、その結果、確信を持って記憶を想起すると考えられる。

次に、偽りの記憶と DES に正の相関関係が見られた。これは、自分が体験した出来事、感情が自分のもののように思えなくなったりし、忘れていてだけで、現実起こったかもしれないと考え、その結果、偽りの記憶を想起したと考えられる。また、解離性体験の頻度が高い者は暗示された情報を自己のもののみなしやすいと言われており、そのため暗示された偽りの出来事、つまり生まれた頃のことを自分の記憶として受け入れやすと考えられる。

続いて、偽りの記憶と SDS に相関関係は見られなかった。その理由として、尺度自体の問題、実験者の問題、心理テストの結果が社会的圧力として働いていなかったという 3 つが考えられる。

最後に、偽りの記憶と TAS に相関関係は見られなかった。この尺度で測られる没頭性は誘導によって想起された偽りの記憶に直接関わっているものではないと考えられる。

本研究の結果から、被暗示性と解離体験の頻度は偽りの記憶を想起するプロセスに大きな影響を与える要因であるということがわかった。記憶を再構成させる方法は、その特徴や個人差を考慮に入れて臨床場面で用いなければ、確信が高く、詳細な偽りの記憶を想起させる危険性が増加するということが示唆された。